

令和8年1月1日

一年の計は元旦にあり

理事長 小野利廣

今年一年皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。

一年の計は元旦にあり、という文言があります。

国家百年の計という文言もあります。国家百年の計は教育にあり、と言われているそうです。一年の計は穀を植えるに如かず、十年の計は木を植えるに如かず、百年の計は人を植えるに如かず、という「管子」に由来する、とのことです。

百年の計は、百年先を考えて、今何をすべきかを考えることでもあります。松下幸之助は無税国家論を提唱しました。高度成長時代、国の予算を節約して貯蓄し、これは定信公の七分積み金同様ですが、その利子だけで国家予算を賄うという超長期・壮大な構想でした。将来を考えて、今から準備するという、財界人としての考え方でした。そして、私財を投じて、その利子で運営し、国家百年の計を考えられる人材を育成しようとしたのが、公益財団法人松下政経塾でした。

昨年の東北経営者大会で経団連永野副会長から、山田方谷の「義を明らかにして利を計らず」の教えるとおり、使命を果たせば、結果は後からついてくる、また福武書店の「経済は文化の僕である」から社会づくりも使命だとありました。尊敬される日本を目指して、危機に強い社会構造・人の能力向上・地方の魅力開放によって、中央で決定していく構造を見直し、新たな国家像を描く必要を説かれました。経営者がサラリーマン化して、自分の社長時期がうまくいけば、という短期的な考え方になっていることを是正しなければならないという話でした。

また、大会で講演をいただいた民俗学者赤坂憲雄先生は、被差別民のいない縄文文化以来の東北の共助社会の良さを強調され、人口減少で東北の誇りを失ってはならないと話されました。

先生は奥会津ミュージアムに次のように書いています。

「震災後に『戦後は明るかった』と繰り返し聞かされた。それとは対照的に災後は暗い。それは何に由来するのか。戦後はきっと、誰もがどん底から民主主義という藁にすがって這い上がるしかなかったのだ。しかし今、急激な人口の減少、過疎化と少子高齢化のゆくえを知る者はなく、ゆるやかな撤退のシナリオが示されることはない。思考停止へと逃げ込んできた」

このような文章を見ると、短期的な視野ばかりで、長期的な視野がないことを痛感します。何世代にもわたって実行していく目標を見つけたいものです。